

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 4 日現在

機関番号：13101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580129

研究課題名(和文) 前近代における地震活動期の研究－15世紀後半と16世紀末・17世紀初頭を中心に－

研究課題名(英文) Analyses of seismic activity period in the history of pre-modern Japan: late 15th century and end of 16th century, early 17th century

研究代表者

矢田 俊文 (Yata, Toshifumi)

新潟大学・人文社会・教育科学系・教授

研究者番号：40200521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：年代記『鎌倉大日記』は信頼できる史料であることを明らかにした。1495年4月12日鎌倉を地震津波がおそったことを明らかにした。

16世紀に鳴門南断層が活動し、0.5～1.0メートルの上下変位を生じたことを明らかにした。1596年の地震によって徳島県撫養地域が隆起し、徳島県撫養地域に塩田が開発されたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Chronicle "Kamakura Onikki" is reliable historical materials. Tsunamis attacked Kamakura on April 12, 1495

Naruto South fault in the 16th century is the activities, and resulting in a vertical displacement of 0.5 to 1.0 meters. The Muya district in Tokushima Prefecture was uplifted by the earthquake in 1596, and the saltpan developed in Muya district, Tokushima Prefecture

研究分野：人文学

キーワード：鎌倉大日記 1495明応関東地震 鎌倉 1596地震 隆起 塩田 伊勢早雲 阿波国撫養

1. 研究開始当初の背景

応募者は、3.11 以後、東国の巨大地震の研究を進め、歴史地震研究会(2012年9月15日、横浜開港資料館)で、行谷佑一氏(地震学・産業技術総合研究所)と共同で「享徳三年(1454年)に奥州を襲った津波」という報告を行い、論文を『地震』(日本地震学会)に投稿中である(のち2014年3月に、行谷裕一・矢田俊文、史料に記録された中世における東日本太平洋沿岸の津波、地震 第2輯第66巻4号、73-81頁、として掲載された)。享徳3年の奥州地震は津波堆積物の分析から3.11の地震津波と類似のものと考えている。また、伊東市でも15世紀末の津波堆積物の存在が明らかになっていて、この津波堆積物は土器編年との対応関係で15世紀末であることは明確となっているが、明応7年(1498)8月25日の南海トラフの明応地震によるものなのか、鎌倉を津波が襲った明応4年の地震なのか明確にできていない。明応4年の地震で鎌倉を津波が襲ったことを明らかにできれば、この津波堆積物は相模トラフの地震によるものであることが確実になる。明応4年か明応7年かの時期の特定は津波堆積物・土器編年研究ではできないため、歴史学の方法で明らかにしなければならないと考えるにいたった。

また応募者は、文書によって、土地の沈降を明らかにしたことがあるので(拙稿「一七七年宝永地震と浜名湖北部地域の沈降」『資料学研究』10,2013)文禄5年(1569)閏7月13日に起った地震によって、阿波国撫養地域が隆起したことを明らかにできると考えた。すでに、活断層研究で16世紀末頃に四国の中央構造線が動いていることが指摘されているが、本研究によって、四国の中央構造線が動いた地震は文禄5年(1569)閏7月13日の地震であると年代を特定することができると思うにいたった。

2. 研究の目的

本研究では、歴史学の立場で地震を研究することにより、15世紀後半と16世紀末・17世紀初頭が地震活動期であることを明らかにする。

具体的な目的は次の2点である。

1.明応4年(1495)の地震が関東地震(相模トラフ周辺で起こる地震)であることを明らかにする。

2.文禄5年(1569)閏7月13日に起った地震(慶長伏見地震といわれている)によって、阿波国撫養地域(徳島県鳴門市)が隆起し塩田になったことを明らかにする。

本研究は、歴史学の方法による文書・年代記の検討により前近代の地震に特定の年を与えることができることを、理系研究者に示すことができる。このことは地震研究が歴史学研究者の研究抜きにはできないことを明確にする。また、従来災害記事が多いことで知られていた年代記研究を前進させる。

3. 研究の方法

(1)年代記を中心とした史料の厳密な分析を行ない、さらに文献によって得られた結論を確かなものとするために遺物・地質資料で確認することにより地震の年代を確定する。従来の説を再検討するため、彰考館本「鎌倉年代記」の災害記事・合戦記事を含めた記事全般を検討する。

(2)徳島県撫養地域の地震により隆起し塩田が生まれたとする記事が記載される文書を検討する。撫養塩田の諸村のうち三ツ石・高島・黒崎・大桑島・小桑島5カ村は真言宗が強い阿波国のなかでも浄土宗が定着するという特異な信仰圏を形成し、この信仰圏の塩田開発と製塩業の展開を主導したのはすべて淡路から撫養地域に移住した人びとであったことがすでに指摘されている。阿波国では信仰上特異な地域の宗教関係史料を検討し、文禄5年(1569)閏7月13日の地震

により、撫養地域が隆起し塩田となったことを明らかにすることにより、四国の中央構造線断層帯が活動したことを明確にする。

(3) 徳島県の中央構造線断層帯がこの地震によって活動したことはすでに活断層研究分野での研究がある。本研究では、改めて徳島県の16世紀末の遺物を収集し、地形を検討し活断層との関係を検討する。

4. 研究成果

(1) 従来疑問視されてきた明応4年(1495)8月15日に鎌倉を地震津波が襲ったとする『鎌倉大日記』の記事が信頼できるか検討した。その結果、『鎌倉大日記』彰考館本の原本における明応4年を含む応仁元年頃～文亀元年の年代記記事の大部分は、後柏原天皇の在位期間とくに文亀元年直後の頃に加筆されたこと、加筆者は当時鎌倉あるいはその近辺に住んでいた可能性が高いこと、明応4年9月の伊勢早雲小田原攻略の記事を否定する根拠はないことを明らかにし、『鎌倉大日記』の明応4年の鎌倉地震津波の記事は信頼できることを明らかにした。

さらに、『鎌倉大日記』によれば、15世紀に鎌倉かその近辺で大きく揺れた「大地震」は6回あったこと、元禄地震・大正地震ではそれぞれ1mほど隆起したとされる江の島は、『鎌倉大日記』によれば明応4年の地震では沈降したことを明らかにした。

(2) 1596年慶長伏見地震の際に、現在の徳島県鳴門市の撫養地区が隆起し、入浜塩田を営むことが可能になったとする史料が存在するので、史料に書かれた内容の信ぴょう性について地形・地質学的な側面から検討を行った。入浜塩田では潮の満ち引きを利用して製塩を行う。したがって、その立地は地形条件によって制限される。撫養地区の塩田が鳴門南断層の上盤に広がっている点、塩田の開発域の南限が鳴門南断層とほぼ一致してい

る点、16世紀に鳴門南断層が活動し0.5～1.0メートルの上下変位を生じたと考えられることなどを勘案すると、地震性隆起が塩田開発の契機となったとする文書の記述内容は事実である可能性が極めて高いことを明らかにした。

(3) 中世阿波国撫養地域と1596年地震の関係について検討し、撫養地域は阿波国の特産物を運ぶ機能を持った湊であったが塩を運んでいないので中世撫養地域では塩を生産していなかったと考えられること、淡路から来て塩田開発した者は中世淡路の三原塩田地域の者で慶長10年(1605)に阿波撫養地域で塩業が始まる理由は寛永8年(1631)10月12日竹嶋村庄屋孫兵衛「申上覚」に記されるように撫養地域が文禄5年(1596)の地震によって「動り上」り塩田に適した地域が成立したためであると考えられることを明らかにした。

(4) 従来注目されることのなかった不忍文庫旧蔵『年代記』(国立公文書館所蔵、写本)を見出し、書誌学的に検討を行い、この年代記の原本における14世紀後半～16世紀後半の記事は、段階的にはあるがほぼ同時代に生きた者により記されたという点で史料として信頼できること、本年代記には13世紀末～16世紀末までの17件の地震記事が記され、なかでも従来地震研究では把握されていなかったとみられる4年分6件の「大地震」(貞治2年(1363)3月、同年10～11月、応永6年(1399)6月12日、応仁2年(1468)3月23日、文明8年(1476)5月頃、同年12月15日)が記されていること、本年代記に「大地震」のみ記される地震は、本年代記の各記主がいずれも居住したと考えられる京都・畿内地域で発生あるいは感じられた地震であったことを明らかにした。

(5) 三重県の津市(安濃津周辺)・徳島県の鳴門市(撫養地区)・静岡県の浜松市(浜松平野)などにおいて考古遺跡および歴史文書と新たに実施した地形・地質調査結果を対比することにより15~17世紀に生じた地震活動に伴う地形変化と土地利用変化の関連性を考察し、それにより安濃津に壊滅的な被害を及ぼした津波が河川遡上型であったこと、撫養地区における入浜塩田の開始が地震性の隆起と関連していること等を明らかにした。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

片桐昭彦, 不忍文庫旧蔵『年代記』と中世の地震, 災害・復興と資料, 査読有, 8, 2016, 18-24

矢田俊文, 中世阿波国撫養地域と1596年地震, 災害・復興と資料, 査読有, 8, 2016, 9-24

佐藤善輝・藤原 治・小野映介, 浜松平野西部における完新世後期の浜堤列の地形発達過程, 第四紀研究, 査読有, 55, 2016, 17-35

片桐昭彦, 『鎌倉大日記』にみる15世紀の関東地震と江の島の隆起・沈降, 災害・復興と資料, 査読有, 6, 2015, 1-6

<http://ci.nii.ac.jp/naid/120005623225>

片桐昭彦, 明応四年の地震と『鎌倉大日記』, 新潟史学, 査読有, 72, 2014, 1-16

[学会発表](計7件)

佐藤善輝・小野映介, 伊勢平野中部における2~4千年前頃の相対的海水準変動, 日本地理学会, 2016年3月22日, 早稲田大学(東京都)

片桐昭彦, 年代記にみる中世の地震 『年代

記』不忍文庫旧蔵本の紹介, 前近代歴史地震史料研究会, 2015年11月7日, 新潟大学(新潟県新潟市)

矢田俊文, 中世阿波国撫養地域と1596年地震, 戦国・織豊期研究会, 2015年8月1日, 中京大学名古屋キャンパス(愛知県名古屋市)

小野映介・矢田俊文・海津 颯・河角龍典, 徳島県撫養地区における塩田開発と1596年慶長伏見地震の関連性, 日本地理学会, 2015年3月29日, 日本大学(東京都)

片桐昭彦, 明応4年(1495)の地震と『鎌倉大日記』, 前近代歴史地震史料研究会, 2014年11月8日, 新潟大学(新潟県新潟市)

Yuichi Namegaya and Toshifumi Yata, Tsunamis affected on the Pacific coast of eastern Japan during period between A.D. 869 and the 1600s inferred from historical documents, AOGS 11th Annual Meeting, 01 Aug, 2014
Royton Sapporo Hotel(北海道札幌市)

片桐昭彦, 明応の地震と『鎌倉大日記』, 戦国・織豊期研究会, 2014年7月26日, 首都大学東京(東京都八王子市)

[図書](計2件)

小野映介, 藤本 潔, 宮城豊彦, 西城 潔, 竹内裕希子ほか, 古今書院, 微地形学 - 人と自然をつなぐ鍵 -, 2016, 182-207

片桐昭彦, 谷口 央, 西尾和美, 西山昭仁, 原直史, 原田和彦, 宮澤嵩志ほか, 歴史学による前近代歴史地震史料集, 新潟大学人文学部, 2015, 1-3

6. 研究組織
(1) 研究代表者

矢田 俊文 (Yata, Toshifumi)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：40200521

(2)研究分担者

小野 映介 (Ono, Eisuke)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90432228

斎藤 瑞穂 (Saito, Mizuho)
新潟大学・人文社会・教育科学系・助教
研究者番号：60583755

(3)連携研究者

なし

(4) 研究協力者

片桐 昭彦 (Katagiri, Akihiko)